ゴットフリート・ケラーの「ウルズラ」(『チューリヒ小説集』)におけるスイス再洗礼派の描き方と現代性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 久男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20509

明治大学教養論集　通巻538号
(2019・3) pp. 61-83

ゴットフリート・ケラーの「ウルズラ」(『チューリヒ小説集』) におけるスイス再洗礼派の描き方と現代性

田　村　久　男

16 世紀におけるスイスの宗教改革を舞台にした短編小説「ウルズラ」は，1877 年末に出版された『チューリヒ小説集』[1] に他の四篇の作品とともに収録された。この短編集は上下二巻に分けられ，上巻は，前年の 11 月からユリウス・ローデンベルクが発行するベルリンの文学雑誌「ルントシャウ」誌に連載された「ハートラウプ」と「マネックの阿呆者」，「グライフェン湖の代官」の三篇を収めている。この三つの作品は外枠の物語で束ねられており，そこでは「オリジナルでありたい」(11)[2] と切望する青年ジャックに，叔父ヤーコプが過去にチューリヒの町で存在した実例として挙げる一連の「枠内物語」となっている。一方，同時に発売された下巻は，17 年前の 1860 年にベルトルト・アウエルバッハの「ドイツ民衆歴」誌に掲載した後，長くそのままになっていた「七人の正義派の小旗」と，この短編集のために新たに書下ろしで執筆された「ウルズラ」の二篇を合わせて一冊とした。当初は上下二分冊の形で販売されたが，作者ケラー晩年の 1883 年に最初の全集に収録された際には単純にそのまま合冊されたため，最終的に『チューリヒ小説集』は以下のような奇妙な構成をとることになった。

1 ハートラウプ　　── 13～14 世紀初め，中世「マネッセ写本」の成立
2 マネックの阿呆者　　── 14～15 世紀初め，「マネッセ写本」その後
3 グライフェン湖の代官　── 18～19 世紀初め，啓蒙主義時代

（以上，三作は現代の語り手による枠内物語）
4 七人の正義派の小旗　――19世紀半ば，1849年のアーラウ射撃祭
5 ウルズラ　――16世紀初め，宗教改革

それぞれの作品はチューリヒを舞台に歴史上の重要な時代や大きな出来事を背景に，実在もしくは架空の主人公の物語が展開するという点で共通するものの，外枠により互いに関連付けられているのは最初の三つの作品だけである。しかも，内容の上から1と2はマネッセ写本をめぐる連続した物語であるが，3以下は内容も時代も異なり，互いに関係のない独立した話である。最後の二つの作品は「枠」からも外れて，それ自体が完結した形で並んでいる。さらに注目すべきは1から4までの作品が時系列に従って配置され，4では作者ケラーの壮年期であった同時代にまでたどり着いているのに，最後の作品「ウルズラ」では再び時代を遡って三百年も昔の出来事に戻ってしまう。短編集としてのまとまりやシンメトリーを考えれば，本来ならこの作品は2と3の中間にあるべきで，最も新しい時代を舞台にした「七人の正義派の小旗」が最後に来るのが自然であろう。それにもかかわらず最後の作品だけが突然，時系列を無視して再び遠い過去へと逆行し，16世紀におこった宗教改革の物語で唐突に全体が締めくくられるのである。

本論では，なぜ「ウルズラ」がこの位置におかれているのかに注目し，作品における再洗礼派たちの描き方を検討することで，これが示唆する現代的な問題を明らかにしたい。

「ウルズラ」

作品の主人公を中心とした主な筋立ては以下のとおりである。――スイスで宗教改革が進行しつつある1523年初め，チューリヒ州政府がローマ法王との傭兵契約を解消したことで，帰国命令を受けた傭兵の一人ハンスリ・ギールは，イタリアから故郷バッハテル山に帰る。この地域では農民たちの間に

千年王国の実現を期待する再洗礼派の信仰が広まっており，ハンスリは久しぶりに幼馴染のウルズラと再会して互いの愛情を確かめあうものの，同時に再洗礼派の狂信的な教えを一途に信ずる彼女の態度に違和感を覚える。さらにウルズラの実家で，父親エノッホをはじめとする再洗礼派の頭目たちがツヴィングリの宗教改革と州政府の方針を批判するのを聞いたハンスリは，彼らの不条理な信仰に強い嫌悪を抱くとともにウルズラからも距離を置き，故郷を離れてチューリヒでツヴィングリの熱心な支持者となる。禁止令により再洗礼派たちは官憲に捕らえられいったんは塔に幽閉されるが，ウルズラを哀れむハンスリによって密かに解放される。しかし奇跡が起こって天使ガブリエルに救い出されたと信ずる再洗礼派の人々は，その後も頑なに自らの信仰に閉じこもる。新教を導入し教会改革に踏み切った祖国チューリヒをカトリック勢力から守るため，ハンスリは兵士として各地で戦い，コモ湖畔のイタリア人酒場でたまたまウルズラと同じ指輪を持つ女フレスカと出会ったことで，忘れていたウルズラへの愛情がよみがえる。1531 年，カトリック諸州との争いでチューリヒ軍はカッペルで大敗し，従軍していたツヴィングリもこの戦いで戦死する。ツヴィングリの身近で戦っていたハンスリも激戦の中で敵の攻撃により意識を失い濠に転落するが，彼の従軍を知って戦場まで跡を追ってきたウルズラにより発見され，カトリック側兵士の手助けもあって命をとりとめる。ハンスリは，再洗礼派の妄信から覚めて昔に戻ったウルズラともに再び故郷のバッハテル山に戻り，そこで農場を経営して幸せな家庭を営む。——

以上が，短編「ウルズラ」の大まかなあらすじで，スイスの歴史の中で大きな分岐点となった歴史的事件，フルドリーヒ・ツヴィングリ（Huldrych / Ulrich Zwingli, 1484–1531）による宗教改革を背景に，架空の主人公ハンスリ・ギールとウルズラとの恋愛物語が描かれる。主人公にまつわる物語はフィクションであるが，『チューリヒ小説集』に収められている他の作品と同じく，舞台背景となる歴史的な事実や出来事は文献資料に基づいて詳細に

再現される。例えば，物語の発端をなすチューリヒ市によるローマ法王との傭兵契約の破棄（1522年末），市当局が主催したツヴィングリとローマ・カトリックとの討論対決「チューリヒ宗教論争」（1523年），教会からの聖像の撤去（1524年），ツヴィングリと再洗礼派の対決（1525年），さらにプロテスタントの拡大に抵抗するカトリック諸州との紛争では，いったんは新旧両派の平和的な和解に終わる第一次カッペル戦争（1529年），グラウビュンデンで起きたムッソー戦争（1531年）に続き，ツヴィングリが戦死した第二次カッペル戦争（1531年）へと至る経緯が，適宜，年号や日付も明記され，ほぼ正確な形で物語の中に盛り込まれている。

スイスにおける再洗礼派は，初めはツヴィングリの改革の中から生まれ，後に批判勢力となって，ツヴィングリと市当局により弾圧，排除されることになったプロテスタント急進改革派の一派である。従って，宗教改革という時代の大きな変革期に，ツヴィングリを中心に新教による教会改革を推し進めるチューリヒを舞台に，対外的には旧教カトリック勢力との戦い，内部では過激な再洗礼派に対する対処という二重の対立構造が物語の背景をなす。このような対立図式の中で，ツヴィングリに傾倒するハンスリと再洗礼派の信徒ウルズラという相反する立場にある主人公同士の恋愛の経緯が物語られるのである。

スイスの宗教改革 ── ツヴィングリと再洗礼派

スイスの宗教改革は，ルターが1517年に公表した「95か条の論題」に触発され，チューリヒを拠点に独自に教会改革をめざしたフルドリーヒ・ツヴィングリに始まる。

1484年，スイス東部トッゲンブルク地方ヴィルトハウスに生まれたツヴィングリは，ウィーン大学で人文学，バーゼル大学で神学を学び，1506年にグラールス州の神父となる。1515年，従軍説教師として北イタリアのマリ

ニャーノの戦いに参加，ここでスイス傭兵の多大な犠牲を目の当たりにして傭兵制度の批判者となる。アインジーデルン修道院教会を経て，1519年，チューリヒの大聖堂の教区司祭（Leutpriester）に任じられたツヴィングリは着任早々，会衆を前に「マタイ福音書」についての一連の説教を行い，ルター同様，真の信仰は「聖書のみ」（sola scriptura）に基づくべきとする自らの立場を明らかにする[3]。この教会での説教と並んでツヴィングリは，聖書研究を目的とする同胞集会（Sodalität）をチューリヒにも立ち上げ，ここには聖職者だけでなく知識欲にあふれる商人や職人など一般の教養市民も参加し，彼の教会改革に共鳴する仲間たちが形成されてゆく。

復活祭に先立ちローマ教会が肉食を禁じていた四旬節期間の1522年3月9日，聖書の文言には肉食を禁止する根拠が存在せず，この習慣は本来のキリスト教の教義とは無関係にいつの間にか混入したものであるとして，ツヴィングリと彼の支持者たちがチューリヒの出版業者フロシャウアーの家に集まり，半ば公然とソーセージを食べる会合を開いた。ツヴィングリ自身は肉類を口にすることはなかったものの，誤った慣習に基づく禁忌をあえて破ったこの挑発行為「腸詰事件」（Wurstessen）は，自らの信条を初めて実践へと移した重要な出来事であり，ツヴィングリの教会改革の第一歩とされる。ツヴィングリの考えは市政を担当する支配層の中にも多数の賛同者を得ており，この年，チューリヒ市参事会は，ツヴィングリがかねてから批判していた外国への傭兵派遣の取りやめを決定し，ローマ法王庁にいた傭兵たちにも帰国を指示する。

翌年1523年，市参事会は，改革を批判するカトリック教会の代表を招いてツヴィングリとの論争の場を設け（1月に第一回チューリヒ宗教論争，10月に第二回），ここでツヴィングリは「67か条のテーゼ」を発表して，カトリックで重んじられていた聖職者の独身制や巡礼，聖像崇拝，ミサ等を根拠のないものと否定し，カトリック側の反論を退ける。ツヴィングリ派の教義は市政府の公認するところとなり，ローマ・カトリック教会からの離脱を明

確にし，ツヴィングリの助言と指導のもとでチューリヒは教会改革を推し進めてゆくこととなる。

ルターがドイツで領主を味方につけたように，ツヴィングリの改革はチューリヒの市参事会に影響力を行使する形での上からの改革であり，また保守的な民衆の反発を抑えるために時間をかけてひとつずつゆっくりと変更してゆくという漸進的なやり方を選んだ。1524年，聖書では禁止されていないとして聖職者の婚姻が許可され，ツヴィングリ自身も既にチューリヒに赴任する以前から事実上の夫婦関係にあり，間に子供までなしていた未亡人アンナ・ラインハルトと正式に結婚する。1525年にはチューリヒ全土で修道院が解散，ミサが廃止される。また，ツヴィングリは友人のレオ・ユートとともに，ルター聖書に先駆けて旧約・新約聖書のドイツ語訳を完成，出版する（「チューリヒ聖書」1524～29年。ルター訳完成は1534年）。スイスの他の町にもツヴィングリに賛同する各地の宗教改革者の活動により改革気運が広がり，ベルンやシャフハウゼン，バーゼルなどもチューリヒに倣い，それまでのローマ・カトリックから新教の採用へと政策転換することになる。

ドイツではルターを信奉する騎士たちによる騎士戦争（1522～23年）や，当初ルターの信奉者から再洗礼派に転じたミュンツァーを指導者としたドイツ農民戦争（1524～26年）などが反乱とみなされ，諸侯により鎮圧される。これによりカトリックの勢力が再び強まり，スイスでも，当時の神聖ローマ帝国皇帝カール5世の支援を受けたシュヴィーツ，ウリ，ウンターヴァルデンなどいわゆる原初三邦の保守的な農民を中心にカトリック諸州の巻き返しが強まった。この様な状況で，ドイツのルター派とスイスのツヴィングリ派の共闘が求められ，ルターの支援者であったザクセン選帝侯とともに改革派の中心人物であったヘッセン公フィリップの仲介で，両者の教義の統一を目指して1529年9月にマールブルクで二人は直接会談を行う。

「聖書のみ」の原則のもと洗礼と聖餐の二つを秘蹟として認め，そのうち聖餐において信者たちがパンと葡萄酒を分ちあうという点では二人の考えは

一致していたが（カトリックでは秘蹟は七つ，聖餐はパン Hostia のみ），その意味づけをめぐって対立し，パンと葡萄酒が聖書の字義通り「キリストの血と肉」に変化すると考えるルターに対して，これを単に象徴的表現に過ぎないとするツヴィングリの主張は最後まで一致に至らず，会談は決裂し，これによってスイスとドイツのプロテスタント連合の夢は破れる。ルター派が「スイスよりもローマがましで，ローマ法王のほうがスイスの改革者どもよりも我々に近い」[4] とツヴィングリ派への反感を表現したように，結局その後も同じプロテスタントでありながらもルター派（ルーテル教会）と，後にカルヴァン派と合体したスイス改革派教会の分離が現在に至るまで長く続くことになった。

スイス再洗礼派の分離

プロテスタントにとって信仰を確認する重要な宗教儀式である二つの秘蹟のうち，聖餐の解釈をめぐってルター派とツヴィングリ派が対立したように，もう一つの秘蹟である洗礼をめぐって内部で考え方の違いが表面化し，ここから再洗礼派（洗礼派）が生まれる。再洗礼派には複数のルーツがあり，当初ルターの信奉者で，後に袂を分ったトマス・ミュンツァーやカールシュタットらも，物心がつかないうちに行われる幼児洗礼を意味のないものと否定し，自らの信仰による成人洗礼（Gläubigentaufe）のみを有効であると考えていた。これとは別にスイスでもツヴィングリに近かったコンラート・グレーベルらが幼児洗礼の賛否をめぐってツヴィングリ派から分離し独自の活動を続ける。1525 年 1 月 21 日，グレーベル，フェーリクス・マンツ，ユルク・ブラウロックら 12 人の信者がチューリヒ近郊のツォリコン（現在はチューリヒ市内）にあるマンツの母親の実家に集まり，互いに洗礼を授けあうという出来事があり，メノー派の宗教学者をはじめとする多くの学者たちは，この日を再洗礼派誕生の日とみなしており[5]，現在でもスイス再洗礼派の流れ

をくむフッター派やメノー派，アーミッシュ，ブレザレン教会といったアメリカ大陸を中心に世界中に存在するアナバプティスト派の信者たちは，グレーベルらにより成人洗礼が行われた1月21日を重要な記念日としている。

しばしば再洗礼派の父とも呼ばれるコンラート・グレーベル（Konrad Grebel, ca. 1498-1526）はグリューニンゲンの城代官の家に生まれ，チューリヒ，バーゼル，ウィーン，パリなどでグラレアヌスやヴァーディアンといった当時著名な人文学者たちのもとで学ぶが，放埒な生活を心配した父親によりスイスに呼び戻される。チューリヒではツヴィングリの主催する聖書研究会に参加し，ここで後に再洗礼派運動の同志となるフェーリクス・マンツ（Felix Mantz, ca. 1498-1527）やユルク・ブラウロック（Jörg Cajakob / Blaurock, 1492-1529）らと知り合う。グレーベルは1523年10月に行われた第二回チューリヒ宗教論争にもブラウロックとともに参加するなど，当初ツヴィングリ改革の支持者であったが，グラウビュンデン出身の出版業者アンドレアス・カステルベルガー（Andreas Castelberger, ca. 1500-ca. 1531）が主催する聖書講読会（Castelberger Lesekreis）にも参加するうちに，次第にツヴィングリによる，市参事会と協力のもと時間をかけて新しい制度に切り替えようとする不徹底なやり方に不満を感じて，市当局に対して教会税（十分の一税）やミサの廃止，聖像の即時撤去など急激な改革を求める。

ツヴィングリと決定的に袂を分かつのは幼児洗礼をめぐってであり，グレーベルらは，イエスの「信じて，バプテスマを受ける者は救われる」（「マルコ伝」16章16節）という言葉に基づき，自らの意志による信仰と洗礼のみを有効とみなした。そもそもイエス自身が洗礼者ヨハネから洗礼（バプテスマ）を受けたのは，割礼とは異なり成人した後のことで，洗礼者ヨハネはヨルダン川で罪を告白し悔悟した民衆たちに赦しのしるしとして洗礼を施しており（「マタイ伝」3章），この儀式がキリスト教に受け継がれたのである。また，宗教改革がはじまったこの時代，しばしば庶民の間では生まれた子供の洗礼を怠る例もあり，教会の記録が残されていないことも多く，子供のころ本当

に洗礼を受けたのか確認できなかったということも成人洗礼を望む運動の要因であったという[6]。ツヴィングリは伝統的に行われてきた幼児洗礼を自明なこととみなし，この問題についての判断を市当局にゆだねる。ツヴィングリの考えを支持する市参事会は全市民に幼児洗礼を命じ，これに従わない者は処罰するという命令を出す。洗礼をめぐりツヴィングリとの間で幾度か直接討論が行われた後，1525 年 1 月 21 日にチューリヒ市の禁令（Täufermandat）により，グレーベルとマンツは説教や集会など市内での一切の伝道活動が禁止され，もともと市民ではないブラウロックやカステルベルガーらはチューリヒから追放される。すでに述べたように，この日，彼らは近郊のツォリコンの町に集まり初めて成人洗礼を行い，これによりチューリヒ再洗礼派，すなわちスイス兄弟団が誕生したとされる。このスイス兄弟団にはグレーベルやマンツ，ブラウロックの他，同じく再洗礼派の活動で主導的な役割を果たすヴィルヘルム・ロイブリン（Wilhelm Reublin, ca. 1484–ca. 1559），ヨハネス・ブレートリ（Johannes Brötli, ca. 1494–1528），ミヒャエル・ザトラー Michael Sattler, ca. 1490–1527）らが加わり，スイスや南ドイツを中心に各地で説教を行い，既存の教会や世俗権力から独立した信者たちの教団（自由教会）をつくり，成人洗礼を広める。チューリヒ州政府も再洗礼派に対する弾圧を強め，捕縛と尋問，拷問を伴う説得を繰り返すが，あくまで自らの信念を変えようとしないフェーリクス・マンツに対してついに死刑が宣告され，1527 年 1 月チューリヒを流れるリマト川に沈められたマンツが，後に続く再洗礼派への過酷な弾圧における最初の殉教者となる。

中部ドイツを中心に拡大した農民戦争がドイツ諸侯により鎮圧され，再洗礼派にとっても中心的存在であったトマス・ミュンツァーが刑死したのち，チューリヒでの活動を禁止されたミヒャエル・ザトラーの呼びかけで，1527 年 2 月にスイスの北東部シャフハウゼン州にあるシュライトハイムの村に主だった人々が集まり「最初の改革派自由教会」[7] が発足する。ここで七ケ条からなる再洗礼派の最初の教義項目が起草される。一般に「シュライトハイ

ム信仰告白」（Schleitheimer Artikel）と呼ばれるこの文書は，信仰による成人洗礼（＝幼児洗礼の否定），信者たちが世俗の権力から独立した共同生活をいとなむこと，牧師は信者たちの互選により自由に選ぶこと（万人司祭主義），そして聖餐の形式が定められた。さらに暴力や軍役の禁止，宣誓の拒否が明記されたことで絶対平和主義の原則が取り決められ[8]，この文書は直ちに印刷され各地に配布された。

ツヴィングリもまもなく「シュライトハイム信仰告白」を入手しすぐに反論文を公表するが，再洗礼派への批判の対象は単に幼児洗礼の否定にとどまらず，この信仰告白で述べられる平和主義が兵役の拒否を意味し統治権力者への不服従とみなされたことで，当局による弾圧はますます強まる。起草者ミヒャエル・ザトラーはこの集会の直後の 1527 年 5 月に南ドイツのロッテンブルクで妻マルガレーテとともに処刑され，チューリヒを追放後にシャフハウゼン州ハーラウを中心に活動していたヨハネス・ブレートリも翌年には捕らえられ火炙りとなる。

同年 8 月，南ドイツのアウクスブルクにスイスをはじめドイツ中・南部，チェコのモラヴィア，オーストリアのチロル，フランスのアルザスなど各地から代表者が集まり再洗礼派会議が開かれる。絶対平和主義の「シュライトハイム信仰告白」をもつスイス兄弟団に対して，武力による抵抗や戦闘を肯定する一派や，終末論を唱える神秘主義的傾向が強い教団もあり，再洗礼派内部でもそれぞれに方向が異なっていたため教義の一致までには至らなかったものの，各地に代表を派遣して伝道を強めることで合意する。再洗礼派の積極的な活動に対して，1529 年，神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント 1 世の招集により新教改革派諸侯も参加したシュパイアー帝国会議でプロテスタント，カトリック両派の了解のもと，再洗礼派を異端とする禁止令（Wiedertäufermandat）が発せられ，違反者は死刑とされる。当初はツヴィングリと行動を共にし，訣別ののちに最初の成人洗礼を受けたユルク・ブラウロックは，チューリヒ追放後，捕らえられては釈放されることを繰り返し

ていたが，結局はこの禁止令によりチロルで火炙りとなる。アウクスブルク再洗礼派会議に参加した人々がこの後もつぎつぎに権力者により逮捕，処刑され多数の殉教者を出したため，この会議は「アウクスブルク殉教者会議」(Augsburger Märtyrersynode) とも呼ばれている。

既にコンラート・グレーベルは 1826 年，グラウビュンデン州のマイエンフェルトでペストで病死しており，またチューリヒの同胞たちと密接に連絡を取りつつ，チューリヒを追放されたヴィルヘルム・ロイブリンらとともにライン対岸の町ヴァルツフートを拠点にモラヴィアなど各地で民衆に洗礼を施し「異端の侯爵」とあだ名されたバルタザール・フープマイヤー (Balthasar Hubmaier, ca. 1485-1528) も，ハプスブルクのフェルディナンド 1 世に捕らえられウィーンで処刑されていたため，初期再洗礼派のスイス兄弟団の指導者たちはほとんど死に絶えたが，その後もスイスでは再洗礼派の厳しい追及が続いたため，信者たちは独自の共同体を作りベルンやジュラ山地などで人里離れた山間部に隠れ住むことになった。

宗教改革研究者の倉塚平氏は，再洗礼派を中心とした急進的宗教改革者について，

> これらの運動の指導者たちは，当初ルターやツヴィングリら宗教改革者に満腔の信頼を捧げ，彼らの忠実な支持者として運動に参加していた。だが改革者たちが世俗権力と結んでローマに代わる新たなる正統派の地位に立ちはじめるやいなや，自己の解する改革理念が裏切られたとして批判の側に転じ，独自にその理念のラディカルな実現を試み，ために新旧両正統派によって徹底的な弾圧を蒙り，その運動は六十年代に至るまでにほぼ完全に撲滅させられてしまうのである[9]。

と概括している。その純粋な信仰理念ゆえに，世俗権力と結びついた新旧の正統派から排除された再洗礼派の信徒たちは，ルターやツヴィングリの後継者たちによりその後も長く狂信的な反逆者とみなされ弾圧が続けられた。19 世紀になってようやくカトリックの宗教学者カール・アドルフ・コルネリウス (1819-1903) やプロテスタント神学者エルンスト・トレルチ (1865-

1925）らによる再評価が行われ，また，共産主義運動家のヴィルヘルム・ヴァイトリング（1808-71）らがミュンツァーによる農民戦争を初めての共産主義革命と高く評価し，戦後になって東ドイツでこのような認識が一般化したこともあり，現在，洗礼派に対するネガティヴな偏見は大きく修正された。チューリヒでは2004年に市の代表者も列席の上，かつて，スイス兄弟団の生みの親の一人フェーリクス・マンツらが市当局の命により溺死刑に処せられたリマト川の河畔に記念プレートが設置され，公式に再洗礼派の名誉回復がなされた。2007年にはスイス改革派教会が彼らの子孫たちに対して当時の迫害を謝罪し，同様の謝罪と名誉回復はドイツやオーストリアでもなされている。

「ウルズラ」に描かれるツヴィングリと再洗礼派像

現在では再洗礼派は，チューリヒで正統派となったツヴィングリによって排除され，狂信者の汚名を着せられた犠牲者という見方が可能なだけではなく，チューリヒ市の顕彰にもみられるように一般にも広く定着している。しかし1877年に「ウルズラ」が発表された当時は，まだ伝統的な再洗礼派像，すなわち過激で狂信的な信者というイメージが根強く，この作品でも，市の改革に反発し抵抗する再洗礼派の姿が徹頭徹尾，批判的に戯画化されるのに対して，彼らが批判するツヴィングリは，自らの正しい改革に信念を持った理想的な人物として描かれている。

ケラー自身は決して敬虔なキリスト教徒とはいえず，むしろ宗教からは距離を置いていたものの，改革派プロテスタント（ツヴィングリ派と合体したいわゆるカルヴァン派）の町チューリヒで生まれ育った。しかもケラーがこの作品の執筆を思い立ったのは，まだ州政府の筆頭書記官に在職中のことであった。正統派改革派教会はチューリヒ市当局の管理責任下にあり，したがってケラーが創始者のツヴィングリの立場を擁護し，これに反抗する再洗礼派

たちの行動を肯定できなかったとしても，それは自然なことであろう。

すでに冒頭の書き出しから作品のテーマが次のように提示される。

> 宗教が変革される際は，山が割れて開くときのように，魔法の大蛇や黄金の竜，人間の心にある水晶の精が光の下に明らかになるのに混じって，あらゆる醜い悪竜（häßliche Tazzelwürmer）や鼠の大群も出現する。宗教改革が始まった時期に，スイスの北東部，とりわけチューリヒの山間地でも同じであり，[…] (303)

と，初めから再洗礼派たちは「醜い悪竜」や「鼠の大群」といったネガティヴな比喩によって否定され，作品全体を通じて再洗礼派に対していかなる理解も同情も認められず，容赦のない批判で一貫している。帰郷したばかりのハンスリがウルズラの両親の家を訪ねた際に，彼女の父親エーノホ・シュヌレンベルガーの他にゴーサウの冷いヴィルツ（der kalte Wirtz von Goßau）やアガズールのシュネック，ヤーコプ・ローゼンシュティールといった田舎預言者（Winkelprophet）たちが集まっており，彼らとハンスリとの間で宗教談議が行われる。この人々は教団の指導的な伝道者ではなく「むしろ雑多な仲介者たちで，世間一般に存在する妄想を奇妙に捻じ曲げて，そこに神秘的伝承を混ぜ込み，民衆が昔からもつ苦しみに動かされ，不穏な空気を醸成して拡散し，その上を泳いでいる」(312) ような輩であった。千年王国の到来を説くエーノホに応じ，ヴィルツは聖書について「聖書が何物だ。[...] 空っぽの皮にすぎず，もしわしが聖なる霊を吹き込んでやらなければ，ただのふいごでしかない。[...] 印刷されただけの本で，他の多くの書物と同様に粗悪な紙の束にすぎない」(315) と聖書重視の本義からさえ逸脱した考えを披露し，さらにシュネックは「主はそこにもここにもおられるし，至る所に主はましますのだ。この足元の床の塵の中にも，海水の塩の中にもおられるのだ」と述べて，汎神論的な立場から人間自身の中に備わる神性を強調し，「それゆえに，我々が主に頼るように，主もまた我々に頼っており，もし主が言うことを聞かないようなら叱りつけて，おとなしく奇跡の験を現し，我々

の意のままにふるまうまで，強い思いと言葉を頭から浴びせかけてやらねばならんのだ」（318）と，あたかも人間が神を自由に操れるかのような傲慢な宗教観が表現される。アガズールのシュネックは学校教師で，ヤーコプ・ローゼンシュティールはかつて修道僧であったにもかかわらず，後の場面で，ハンスリの牧草地でひとり作業するウルズラを見かけ，それぞれに欲心をおこして強引に言い寄り，逆に彼女に手に持っていた刺股で撃退されるという滑稽な場面が続き，表で教義を説きながら実は好色な人物であったと暴露することで，再洗礼派のいかがわしさが強調される。

これらの描写は必ずしもすべてがケラーの創作というわけではなく，この作品を書くにあたって再洗礼派に関する詳しい知識と題材を主にメルヒオール・シューラー著『スイス人の功績と暮し』とヨーハン・カスパール・メリコーファー著『ウルリヒ・ツヴィングリ』の二冊の本から得ている[10]。シューラーの本は，書名に「祖国の青少年のため」と付されているように，スイスの歴史にかかわる数多くの史実やエピソードが盛り込まれた通俗歴史書に類する一般向けの歴史読本である。この『チューリヒ小説集』の中にも「ハートラウプ」をはじめ，いくつかの作品に題材を提供しており，いわば作者のネタ本の一つであるが，改革派福音教会の聖職者で教育者でもあった著者シューラー自身の善悪にかかわる価値評価が強く反映されている。シューラーは，チューリヒ再洗礼派の創設者であったコンラート・グレーベルとフェーリクス・マンツの人物について次のように述べる。

> 彼（グレーベル）と親しいフェーリクス・マンツは，ある司祭の息子で，グレーベルと同じく学識はあったが狂信者で，名声と財産だけが目当ての人物だった。二人は，他の何人かの信者たちとともにミュンツァーやドイツの再洗礼派たちに合流した。ツヴィングリとルターの改革を「小さすぎるし狭すぎる，精神にも欠け，誇りもなく，十分なものとは言えない」と非難していた。言葉は立派だがその裏には彼らの支配欲と物欲が隠れていた[11]。

ドイツ農民戦争の指導者トマス・ミュンツァーと，グレーベルらスイス兄

弟団との間の連絡や協力関係については疑問点が多く，グレーベルがミュンツァーに宛てて書いた手紙が残っているものの，この手紙はミュンツァーのもとには届かなかったとされており，しかも手紙の中では明確にドイツ諸侯に対する暴力的抵抗を戒めている[12]。歴史学者ジョフリー・エルトンが「彼らの宗教理念の多くは独自に発展させたものであり，特に，ミュンツァーの暴力や黙示録的夢想を共有することは決してなかった」[13] と言っているように，暴力めぐっては正反対の考え方であった。にもかかわらずシューラーは両者を再洗礼派の名のもとにひとくくりにして謀叛者のイメージを強調し，グレーベルやマンツの伝道活動が利己主義的な私利私欲が動機であったと指弾する。もう一冊，典拠となった歴史家メリコーファーのツヴィングリ評伝はシューラーと違ってアカデミックな学術書であり，当時の書簡など広範かつ膨大な資料に基づき批判的な叙述がなされるものの，彼もまた改革派福音教会の牧師であり，やはりツヴィングリ側の立場から，これに反逆した再洗礼派については否定的な見方をしている。

作品中で，チューリヒを追放されたウルズラの父エーノホは逃亡先で，火を食べたり，屋根越しに神様と話をしたり，一度死んで生き返ったりといった奇妙な術を取得し，民衆を前にあちこちで披露する（345)。シューラーもこのような再洗礼派の「様々な奇行」(allerlei Tollheiten) を報告している。

> これらの一つがいわゆる「死」である。彼らは死んだように地面に寝そべり，喘ぎつつ痙攣し，口から泡を吹いて身もだえし，体を膨張させ，顔を引きつらせて苦悶の表情を作る。それから再び我に返り，神の言葉と称してお告げを垂れたのである[14]。

また，このような死の擬似体験にもまして異様な信仰の表現が「子供遊び」である。ケラーの作品では，第二次カッペルの戦いの直前の 1531 年 10 月 10 日のこととして，再び故郷に戻った再洗礼派たちはイエスの言葉「この幼な子のように自分を低くする者が，天国でいちばん偉いのである」(「マタ

イ伝」18章4節）を字義通り解釈して実際に幼児を演じる。エーノホは「裸足になって子供服代わりに赤い古びた婦人服を身に着けて床にしゃがみ，板切れで小さな荷車を作り籾殻を積みこみ」ながら「ロ，ロ，ロ，ダダ，ダ」（360f.）と赤子を真似た声を発し，また，アガズールのシュネックは，おしゃぶりを加えて赤ん坊の歩行器に潜り込んで名前の通りカタツムリ（シュネック）を演じ，ヴィルツはストーブにまたがり乗馬遊びにふける等々，男女を問わず既に年老いた信者たちの子供遊びの様子が具体的に描かれる。シューラーの本でも，チューリヒを追放されザンクト・ガレンに移った信者たちの様子を次のように報告する。

> これらの狂信者の一人が「子供のようであれ」と叫び，まったく子供のようにふるまうよう命ずると，みんなは子供遊びを始めた。とりわけ女たちは熱心に，飛び跳ねたり，手拍子を打ったり，リンゴを投げ合ったり，樅の松ぼくりを糸でくくって引きずり回すといったような様々な遊びを始めた[15]。

この他にも，例えばバッハテル山で集会を開いていた再洗礼派たちが，狩りをしに来たグリューニンゲンの代官一行を見て捕縛に来たと勘違いして慌てふためきつつ逃げ惑う場面（336f.）や，いったん市当局よって捕まり囚人としてチューリヒの「異端者の塔」に収監された彼らが，ウルズラを哀れんだハンスリによって夜中ひそかに塔から救い出されたにもかかわらず，奇跡が起こり自分たちを天使ガブリエルが助けてくれたと触れ回ること（346f.）など，シューラーやメリコーファーが紹介するエピソードに基づいており[16]，双方の記述を比べるとケラーの描写の方は，特に再洗礼派の儀式とされる奇妙な振る舞いなどは，誇張と脚色を加えることで，おぞましいまでにグロテスクな場面となっており，ここには単なるユーモアをこえた悪意さえも感じられる。

これに対して彼ら再洗礼派に「思いあがった語学者先生」（jener eitle Grammatikus und Magister, 316）と揶揄されるツヴィングリは，支持者

側にいるハンスリの称賛は当然としても，地語りの部分でも最初から最後まで非の打ちどころのない理想的な人物として登場する。ツヴィングリは「神自らがすべてお見通しであると素直に信じながらも，同時に細心の配慮を払い，物事や人間について深い洞察力をもって，敵対する世界の策謀や暴力に対してひるむことなく戦った」(349) のであり，戦場で倒れる場面では，夕日が彼の「確信に満ちた穏やかな」死顔を照らし，それは「結局のところ正義を行い，英雄としての任務を果たした」(367) ことを意味するのであり，死後，ツヴィングリの魂は「英雄」の一人としてキリスト教の諸聖人やヘラクレス，テセウス，ソクラテス，ピンダロスらと同列に並べられる。

両親の影響で再洗礼派の熱心な信者であったウルズラが，最後にその妄信から解放されるのも，ハンスリを戦場に追いかける途上で出会うツヴィングリのおかげである。森の中で見かけたツヴィングリの「好感の持てる外見が，じっと見つめるこの女の魂を明るく照ら」し，「この姿から健全さと優しい慰めが一筋の明るい光となって彼女の苦悩に満ちた胸の中へとさしこむ」(364f.) のである。

結局のところ物語は，歴史的事実をふまえながらも，ツヴィングリ派は正義，再洗礼派は悪という単純な図式の中で，再洗礼派に染まったヒロインがツヴィングリのもつ不思議な力のおかげで正しい姿に立ち戻り，正しい男とともに幸せに暮らすという，とってつけたようなハッピーエンドで終わる[17]。一方の再洗礼派は，ウルズラの両親のように間違った信仰を最後まで捨てず不幸なまま死んでゆく。物語の結びは，二人の子孫が故郷バッハテル山の農場「ギーレンホーフ」で二百年にもわたって住み続け，再洗礼派は相変わらずおどけた行為を続け，「今でもその種の人々は時折あの山の辺りに現れる」(371) と，過去の話を現在につなげるメルヘンにありがちな定型スタイルで締めくくられる。

この作品は宗教改革者ツヴィングリとその批判勢力であった再洗礼派との抗争を扱った珍しい小説であり，文学史的な意味では貴重である。しかし再

洗礼派の活動や生活の様子が詳細に描かれるものの，スイス兄弟団の担い手であった社会の下層農民への同情はほとんど感じられず，戯画化することにより，ひたすら否定に終始する。当然ながら，再洗礼派の再評価が済んで，宗教改革という歴史的文脈の中で検証し直されている現在の視点からすれば――むろん，現代の価値観や研究成果から過去に書かれた作品を批判するのは公平ではないが――いたるところ伝統的な偏見や誤解にあふれており，また，作者自身も認めているように作品の完成度も決して高くはない[18]。

「ウルズラ」の評価と現代性

初めにも述べたように，「ウルズラ」は，1877年の出版時には『チューリヒ小説集』下巻の中に，はるか以前に完成していた「七人の正義派の小旗」とともに収められ，1883年の全集版では，巻割を取り払っただけでそのまま同じタイトルのもと一つの作品群として収録される。最初の三つの短編は枠内物語を形成しており，その内部に別の物語を組み込むのは外枠のテキストの書き換えが必要になるために難しかったとしても，最後の二つの作品は完全に独立しているので，物語の時代に従って前後を入れ替えるくらいは容易だったはずである。この二篇は，若い男女が障害をのりこえ最後には結ばれて幸せになるという終わり方では似ているものの，「ウルズラ」がツヴィングリと再洗礼派の和解しえない宗教対立を扱っているのに対して，先に置かれた「七人の正義派の小旗」は1848年のスイス連邦と自由主義的な新憲法が成立した翌年，これを祝うアーラウの町で開催された射撃祭の様子を描いており，自由と民主主義の実現を称える祝賀的な雰囲気にあふれている。単に時代だけでなく内容からしても，16世紀の宗派対立の「ウルズラ」よりも，19世紀の和解と自由をテーマとした物語で終わった方がはるかに自然であり落ち着きもいいであろう。にもかかわらず，ケラーは「ウルズラ」を末尾に残すことで良しとした。一見，無造作とも思えるこのような配置に，

どんな意図があるのであろうか。

文学研究者のエーミル・エルマティンガーは「ウルズラ」を，これが書かれた時代を直接に反映する作品とみなし，ケラー自身が若いころに経験した「シュトラウス騒動」と「義勇団事件」を挙げる[19]。シュトラウス騒動（Straussenhandel）は 1839 年，創設間もないチューリヒ大学がリベラルで知られた宗教学者ダーフィト・フリートリヒ・シュトラウスを教授として招聘しようとしたことに反発して，保守的な農民たちが州政府に対して起こした暴動で，これにより自由主義的な政権が倒れ保守派に替わる。エルマティンガーが指摘しているように，この暴動の中心的な担い手はチューリヒ山間部の農民たちで，ちょうど作品の舞台となった再洗礼派の活動拠点と重なる。もうひとつの義勇団事件（Freischarenzüge）は 1844 年，カトリック州のルツェルンが，州の教育をイエズス会に委ねる決定をしたことに抗議して，プロテスタント州で義勇団が編成され，二度にわたり実力で阻止しようとした事件である。この遠征軍は結局は撃退され，逆にカトリック諸州の結束を強める結果となり，カトリック分離同盟（ゾンダーブント）が成立，その結果スイスが新旧両派に分裂して戦う 1847 年の宗教内戦「ゾンダーブント戦争」へとつながる。二回目のルツェルン遠征軍にはケラー自身も義勇兵の一人として参加しており，戦闘の機会はなかったものの，この経験は後に「アムライン夫人とその末子」という作品で使われる。前者のシュトラウス騒動では一時的にせよチューリヒで進歩的な自由主義政権が転覆し，後者では作者自身も参加した義勇兵の遠征は二回とも失敗していて，再洗礼派をどちらの側に重ねたにせよアナロジーは明確ではない。仮に個別の描写で部分的な連想はあったとしても，作品全体の理解するうえで，これら二つの事件との関連付けはそれほど大きな意味はもたないように思われる。

ケラー研究者のゲルハルト・カイザーも 1981 年に出版した評伝の中でこの「ウルズラ」にはかなりのスペースを割いて作品を分析し，ここに反映された時代との関連性を指摘する。カイザーは，物語で描かれる事件自体より

も舞台となる社会の対立構図を重視し，再洗礼派の夢想する世界が「市民社会の混乱」を意味し，一方，ツヴィングリの宗教改革は「市民社会の革新」[20] であって，両者が対置されているとする。そして，作者ケラーの時代に市民社会に混乱をもたらすものとして，共産主義者のヴィルヘルム・ヴァイトリングやフェルディナント・ラサール（1825-64）らの社会主義運動を挙げ，この運動に対するケラーの内心の反感を指摘する。ケラーは，社会の貧者を救うという彼らの理念には一定の理解を示しながらも，その中に自分たちが指導的立場に立ちたいという利己的な意図を感じており，また女性解放を標榜する自由恋愛思想に市民社会の秩序を脅かす危険性を見て取った。特にヴァイトリングの革命思想は宗教的性格を強くもっており，すでに述べたようにドイツ農民戦争を共産主義革命の萌芽と高く評価し，再洗礼派の指導的人物であったトマス・ミュンツァーの黙示録的な千年王国の教義にも共感を示していた。ヴァイトリングは，私有財産はもちろん既存の家族制度さえも否定し，その思想はアナーキズムに近いものであった。ケラーは若いころ革命詩人ゲオルク・ヘルヴェークやユリウス・フレーベル，アウグスト・ルートヴィヒ・フォレンら亡命ドイツ人作家たちのサークルに出入りし，ラサールとも付き合いがあり[21]，彼らの革命的な自由主義に共感していたが，カイザーはここにケラーのリベラル思想の限界点を見ている[22]。

スイス連邦成立後の 1855 年に留学先のドイツからチューリヒに戻ったケラーはリベラルな新聞紙上で多くの政治的な記事を発表している。その中でスイスの鉄道王アルフレート・エッシャーに代表される，近代化をひたすら推し進める進歩主義政策を「金満政治」であると批判し続けるが，1861 年，友人たちの推薦によりチューリヒ州の高官である筆頭書記官に就任したことで「エッシャー体制」に取り込まれる形となり，逆にかつての仲間たちから批判を受ける立場となる。1868 年の選挙の結果，民主派が多数を占めエッシャー体制は崩壊するものの，ケラーは引き続き職に留まり，1876 年に辞職するまで十五年間チューリヒ州政府で執務を取り続けた。「ウルズラ」が

執筆されたのは退職の翌年であり，長く体制側にいて市民社会の秩序を維持することが職務であった作者ケラーが，当時，盛んになりつつあった共産主義運動の脅威を再洗礼派と重ね合わせた，というカイザーの解釈は十分な説得力がある。再洗礼派が共産主義であったとするなら「ウルズラ」の物語は発表当時，まさに現代の話だったのである。さらに言えば，オプティミズムにあふれた「七人の正義派の小旗」の後に，突然のように16世紀の宗教対立の世界が現れるのも意味があることであろう。新旧両派の内戦であるゾンダーブント戦争の終結と翌1848年の連邦国家成立を国民統合の一つの頂点として，その後のスイス連邦は急激な近代化と産業発展にともなう労働問題や貧困，不平等な選挙制度への批判など，様々な社会問題に直面する。そんな中で過激な共産主義運動が民衆の中にも着実に支持者を増やしていた。「ウルズラ」が執筆されたのはこのような時代状況においてであり，『チューリヒ小説集』はスイスの歴史全体をペシミスティックに締めくくることで，当時の市民社会が持っていた危うさへの警鐘を鳴らしていると考えられる。

《注》

1) 作品のタイトル名は，石井不二雄，白崎嘉昭，小菅善一，光野正幸訳『チューリヒ小説集』(「ケラー作品集　第三巻」松籟社　1988年) に従い，本文の訳出にあたっては光野正幸氏の訳文 (「ウルズラ」同書241～310頁) を参考にした。
2) Gottfried Keller: Züricher Novellen. Hg. von Thomas Böning, Frankfurt a.M. 1989 (Sämtliche Werke in 7 Bdn. Hg. von Th. Böning, G. Kaiser u. D. Müller, DKV Bd. 5) 作品本文の引用はこの巻から，括弧内に頁数のみを記す。
3) Franz Rueb: Zweingli. Wiederständiger Geist mit politischem Instinkt. Baden 2016, S. 74f.
4) Martin H. Jung: Die Reformation. Wittemberg-Zürich-Genf 1517-1555, Wiesbaden 2016, S. 122.
5) Andrea Strübind: Das Schweizer Täufertum. In: Die Schweizerische Reformation. Ein Handbuch. Hg. von Amy Nelson Brunett und Emidio Kampi. Deutsche Ausgabe im Auftrag des Schweizerischen Evangelischen Kirchenbundes, bearbeitet von Martin Ernst Hirzel und Frankmathwig, Zürich 2017, S. 397.

6）M. H. Jung, S. 125.

7）M. H. Jung, S. 126.

8）Schleitheimer Artikel (Schleitheimer Täuferbekenntnis) In: Homepage „Schleitheimer Museen“ (Faksimile und Übersetzung) http://www.museum-schleitheim.ch/taeufer_bekenntnis1.htm

9）倉塚平，田中真造，出村彰，萩原溢恵，森田安一編訳『宗教改革急進派』ヨルダン社，1972年，pp. 6.（倉塚平「序説　ラディカル・リフォメーション研究史」）

10）Melchior Schuler: Die Thaten und Sitten der Eidgenossen, erzählt für väterländische Jugend in Schule und Haus. 2 Abteilungen, Zürich 1838. Johann Caspar Mörikofer: Ulrich Zwingli nach den urkundlichen Quellen. 2 Bde., Leipzig 1867/69. Vgl.: Gottfried Keller: „Züricher Novellen, 2. Band. Sieben Legenden“ Sämtliche Werke, Bd.10, Bern 1945, S. 329, S331 (im wissenschaftlichen Anhang des Herausgebers Carl Helbling)

11）M. Schuler, 2. Abt, S. 66.

12）グレーベルからミュンツァーに宛てた手紙が残っているが，結局この手紙は届かなかった。コンラート・グレーベル（森田安一訳・解題）「トマス・ミュンツァーへの手紙」（『宗教改革急進派』129～154頁。特に148頁と森田氏による訳注(1) 151頁）を参照。

13）G. R. Elton: Europa im Zeitalter der Reformation. Hamburg 1971, S. 75f. (zitiert aus DKV, S. 664.)

14）M. Schuler, 2. Abt. S. 117.

15）M. Schuler, 2. Abt., S. 112.

16）それぞれ，M. Schuler, 2. Abt., S. 71f., S. 64, および J. C. Mörikofer, Bd. 2, S. 70.

17）ベンテリ版ケラー全集の編集者の C. ヘルプリングは，ツヴィングリに示される「純粋で理性的なものが，この短編の構成において，不純と不合理に陥った再洗礼派たちの描写に対してあまりに弱すぎる」と述べている。Gottfried Keller: Sämtliche Werke Bd. 10, Verlag Benteli AG., Bern 1945, 330f. (Anhang des Herausgebers Carl Helbling)

18）ケラーはシュトルム宛の手紙の中で，「この短編は未完成です。書店側のクリスマス商戦のせいで，これに間に合わせるよう急かされて，唐突に物語を締めくくらなければならなかったのです」と弁解しているが，1883年の全集版にも大きな修正を加えずに収録しているので，現在の形でよしとしたと思われる。Gottfried Keller: Sämtliche Briefe in 4 Bdn. Hg. von Carl Helbling, Bern 1950-54, Bd. 3.1, S. 420. (an Thodor Storm, 25. Juni. 1878)

19）Emil Ermatinger: Gottfried Kellers Leben, mit Benutzung von Jakob Baechtolds Biographie. 8. neu bearbeitete Aufl., Zürich 1949, S. 499.

20) Gerhard Kaiser: Gottfried Keller. Das gedichtete Leben. Frankfurt a.M. 1987, S. 494.

21) 1861年9月22日，チューリヒでラサールの歓迎会がありケラーも出席するが，ラサールの話に怒ったケラーが椅子を振り上げて大騒ぎになり，翌朝の公務初日に大幅に遅刻したというエピソードがある。

22) G. Kaiser, S. 498.

（たむら・ひさお　政治経済学部教授）